Fate/BattleRoyal

マングローブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／ＢａｔｔｌｅＲｏｙａｌ

【Ｎコード】
Ｎ９５１０Ｚ

【作者名】
マングローブ

【あらすじ】
正史とも通常とも異なる冬木の第四次聖杯戦争。七騎所ではない・・・百騎もの英霊が覇を競う凄惨なるバトルロワイヤル・・・
そんな折、令呪を意図せずして刻まれた魔術を使う私立探偵、鳴宮奏は気のりしないまでも生き残る為に参加を決意し最弱にして最強のキャスターと共に百組の殺し合いに身を投じる。
一方、典型的な学生最下層の高校生、紫之寺神威は学校を一組の魔術師とサーヴァントに壊滅され自身にもその刃が迫った時、赤き暴君が眼の前に舞い降りた。

登場人物　設定（前書き）

身の程知らずにも・・・いえ、かなり無謀ながらこの度、Ｆａｔｅの二次創作に挑戦して見ました。はっきり、言いますが、私自身、原作の知識は乏しいながらももう好き勝手に書いて見る事にしました。

初めてなので至らぬ事も多いと思いますが、私も原作知識を調べながら書いて行きます！

登場人物　設定

鳴宮（なりみや）　奏（かなで）

【年齢】２２歳

【身長・体重】１８０？　５６？

【特技】体術などの武術全般、身体強化魔術

魔術を使う私立探偵。令呪を刻まれた事で此度の聖杯戦争に気のりしないながらも参加する事となる。

性格は基本的に仕事以外は無気力でズボラ。だが、異常なまでの身体能力をも誇っておりあらゆる武術と戦闘技術を身に付けている。

口癖は　「まあ、一応」

キャスター

【マスター】鳴宮　奏

【真名】不明

【身長・体重】１６０？　４３？

【属性】中立・中庸

【ステータス】筋力Ｅ　魔力Ａ＋＋　幸運Ｃ　敏捷Ｂ　宝具ＥＸ

奏が召喚したサーヴァント。見た目こそあどけない少年だが、その物腰も話し方も子供離れしている。

かなり、飄々とした性格で悪戯好き。さらに現代への適応力も高く電化製品なども数日で問題なく使いこなしている。（主にノートＰＣ、ＴＶ、ＴＶゲーム、携帯など）いつ如何なる時も娯楽に興じる柔軟性（図太さ）の持ち主。口癖は「最弱のキャスター。されど、最強のキャスターだ」

紫之寺（しのでら）　神威（かむい）

【年齢】１６歳

【身長・体重】１７０？　５０？

【特技】世界史・絶対音感
魔術とは縁のないごく普通の高校生。性格は極めて内向的で非社交的。交友関係も精々がパシリに使われるなどお粗末な物。
これまで変わり映えがない他人に良いように使われる日々を送って来たが、一組の魔術師と英霊に自身の通う学校を壊滅された事で状況が一変。その際に自身も令呪が刻まれ半ば偶発的にセイバーを召喚。何の準備も心得もなく百組の殺し合いに参戦する事に・・・
尚、これが切っ掛けとなって閉じていた魔術回路が開いている。

セイバー
【マスター】紫之寺　神威
【真名】ネロ・クラウディウス
【身長・体重】１５４？程　４２？
【属性】混沌・善
【ステータス】筋力Ｂ　魔力Ａ　幸運Ｂ　敏捷Ａ　宝具ＥＸ
神威が召喚したサーヴァント。魔術師としては半端者も同然な神威に召喚されたにしてはスキルはかなり高め。性格は我儘な王様気質で内向的な性格の神威を強引にズイズイと引っ張って行く。ある意味良いコンビ・・・
尚、真名の方は原作同様、マスターである神威に嫌われる事を恐れて未だに隠している。

序幕

　ある部屋の床に異様な魔法陣を描き詠唱を唱えている男がいた。
その男の外見は眼が隠れる程にボサボサの黒髪に服装は皺くちゃのポロシャツにジーパンと外見にはかなりの無頓着さが窺える。
そして、彼の左手の甲には血のように赤い三画の幾何学的な刺青のような物が刻まれていた。それは彼がある凄惨な戦争（ゲーム）のトロフィーに見染められた証であった。そして、これはその凄惨な戦争（ゲーム）を生き残る為に必要不可欠な駒を呼び寄せる儀式であった。
「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。
閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。
繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する」
左手の紋様が発光し儀式がさらに進んで行く。

「Ａｎｆａｎｇ（セット）」

「―　告げる」

「―　告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」
周囲に風と魔力が立ち込めて行く。儀式はいよいよ、佳境へと入ろうとしていた。

「誓いを此処に。
我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。
汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ―！」

詠唱が終わると同時に凄まじい閃光と暴風が炸裂し次に静寂が訪れた時には魔法陣の中央に一人の少年が立っていた。年齢は恐らく十五・六程。黒のローブを纏い、星のように輝く銀髪に澄んだ碧眼。顔はまだ、あどけないものの、その表情と眼にはとても怜悧な物を感じさせ年齢不相応の迫力がこの少年には備わっていた。
それもその筈、見た目こそ幼くともこの少年はれっきとした『人外の存在』に他ならないのだから・・・そして、少年はどこか不敵な笑みを零して口を開いた。

「問おう。君が私を現界せしマスターかね？」

「うん・・・まあ、一応」
呼び出した男は気のない返事で問いに答えた。それに対し少年は眼を丸くして問い質した。
「なんだい。その如何にも気の抜けた返事は？君自身が望んで私を召喚せしめたのではないのかね？」
少年が半ば呆れたように問うと男は男で左手の紋様―令呪を見せてウンザリそうな声音で言った。
「こんな物が唐突に刻まれたら呼ぶ以外にどんな選択肢が？」
「ふむ・・自らの意思で聖杯を求めたのではなく聖杯の方が君自身を求めたと・・・？確かに難儀且つ災難だったね。まあ、それも運のつきと思って諦めたまえ」
少年は身も蓋もない・・・そして、さらにこう続ける。
「それに・・・その気になれば令呪を放棄する事とてできたはずだ。にも拘らず、こうして私を召喚したと言う事は君自身も聖杯を求める理由がある・・と言う事なのだろう？」
それに対し男は渋々と言った声で・・・
「まあ・・・それなりに」
「相も変わらず気のない返事だね・・・まあ、いい。取り敢えずは

マスター。君の名を教えてはくれないかね？」
「鳴宮奏（なりみやかなで）・・・・」
「では奏。これで契約は成立だ。共にこの戦争を勝ち残り聖杯を手にしよう。では次は私が名乗るのが礼儀だが、真名は・・・・今は伏せておくとしよう」
奏は相も変わらず気のない声で問うた。
「何で？」
すると、少年は茶目っけ溢れた眼を輝かせて言った。
「その方が謎のサーヴァントって感じでカッコいいじゃないか」
「ああ、そう・・・」
奏はやはり、気のない声で相槌を打つ。
「まあ、とは言えクラスは教えなければなるまいね。私は今回・・・と言うより私の能力に相応しくキャスターのサーヴァントとして現界した」
その言葉に奏は少し、不安そうに尋ねる。
「キャスターって・・確か、七つのクラスの中で最弱って言う・・・？」
そうキャスターは七騎のサーヴァントの中で最弱とされている。その主な理由は元が魔術師故に白兵戦には乏しいと言う事・・・さらに言えばその一番の持ち味である魔術自体も『三騎士』と呼ばれる高い対魔力を備えたサーヴァントには全く、役に立たないと言う事だ。
奏は令呪が刻まれた日から聖杯戦争について出来る限りの事を調べた。故にその程度の知識は持っていたのだ。故に少し、不安になる。
やっぱり、聖遺物もなしって言うのが無茶過ぎたか・・・
と、マイナス的な事を考え始めた奏に対し少年・・・いや、キャスターは朗らかな声で言った。
「なに心配する事はない、マスター」

その言葉に奏が不意にキャスターの方を見ると彼は朗らかながらも不敵な笑みを浮かべて言った。

「確かに、この身は最弱の魔術師（キャスター）・・・されど、最強の魔術師（キャスター）だ。聖杯は必ずや我らに微笑むだろう」

ここに正史とは違う第四次聖杯戦争が始まった。

第一幕（前書き）

変な所があったらすいません。
あと主人公チートです。本当にすいません・・・・

第一幕

岩に刺さった剣の前に一人の少女がいた・・・少女はその剣を抜こうと手を伸ばした―

「それを手にする前にきちんと考えた方がいい」

それを老人の声が止める。老人はこう続ける。

「その剣を抜いたが最後、お前は人ではなくなる。歳もとらず、ただ国の為、王として生きる他なくなるのだぞ」

それでも少女は頷かなかった。老人はさらに言葉を尽くして説得する。

「その剣を抜いた先、お前の前には栄光と破滅が等しく訪れるだろう。それでも尚、その剣を取るか？」

すると、少女は笑って言った。

「多くの人が笑っていました。それはきっと、間違いではないと思います」

そして、少女の人生はそこで終わった―

奏はパチクリと眼が覚めソファーから起き上がった。そこは奏が事務所と住居を兼ねている部屋で大抵はここで寝食をしている。現在の時刻は深夜の三時。

さっきの夢・・・もしかして、キャスターの？マスターとサーヴァントは意識がリンクしているから互いの過去夢を見る事があるってアレか？

しかし・・あの夢って・・・・ん？そう言えばキャスターは何処に―

奏はふと、自らのサーヴァントの姿が見当たらない事に思い至り辺りを見回す。霊体化しているのだろうかと思ったが、訪ね人はすぐに現れた。それも事務所の入り口から―

「やあ、お目覚めかね」
奏はまず、キャスターが両手に抱えている紙袋を見た。そして、問うた。
「その紙袋は何だ？」
「ああ、これかね？ノートＰＣと言う物を買って来た。これから戦争が始まる。ならば情報収集は必須だろう」
「ノートＰＣならとっく家にあるけど。と言うより金はどこから？それ以前に店は閉まっているだろう」
奏の言葉にキャスターは少し、ギクッとした後、無駄に爽やかな笑顔で言った。
「それじゃあ早速、設定を始めよう」
と紙袋からノートＰＣが納められた段ボール箱を取り出す。

無視された・・・

奏はどこか諦めたような顔で嘆息をつく。
一方、キャスターは素早くＰＣを取り出し手際良く設定を進めて行く。

と言うか、随分と順応性が高いサーヴァントだな・・・そりゃサーヴァントは皆、英霊の座である程度は現代の知識を得て限界すると言うが・・・それにしたって・・・・

「それにしても魔術師（キャスター）とも在ろう者が機械を躊躇もなく使うとは思わなかったよ。昨今の魔術師はよっぽどの物好きでもなければ手にも触れないって言うのに・・・」
奏が呆れたように言うとキャスターは設定を進めながら答えた。
「そうなのかね？それはいかんな・・魔術師たる者、視野を広く持たねば。それに引き換え君は機械類にも躊躇なく手を出しているようだね。感心、感心」

「俺は別に仕事をする上で有益と思ったから魔術をかじっただけだよ。別に時計塔の連中のような『根源に至る』なんてご大層な理由で学んだわけじゃないさ」
すると、キャスターは興味深そうに奏を見据えて聞いた。
「ふむ・・仕事とはどのような事を？」
「探偵だよ」
「ほう・・明智や金田一のようなかね」
「どこで知ったんだよ、そんな事・・・と言うかお前って本当に順応性高いのな・・・生憎と俺はそいつら程、頭が特別いいと言うわけじゃない。有り体に言えば『何でも屋』だな」
「ふむ・・何でも屋？では犯罪の捜査を実際にしている訳ではないと？」
「馬鹿にするな・・一応、そう言う依頼だって来るさ」
すると、キャスターは首を傾げる。
「しかし、頭が特別いいと言うわけではないのだろう？」
「まあ、俺には頭に代わる物があるからな」
「頭に代わる物・・それは一体・・・ッ！」
そこでキャスターはサーヴァントの気配を感じ、奏もそれに気づく。
「サーヴァントか？」
「ああ、それもこの事務所の真ん前だ・・・舐められた物だな。さて、どうするマスター？私のようなキャスターの一般的な戦い方としては陣地を作って待ち伏せるのがセオリーではあるが・・・」
「お前すっかり忘れてた物な」
奏が若干、青筋を立てて突っ込むとキャスターはあははと言って誤魔化す。だが、すぐにまた、あの不敵な笑みを浮かべて言う。
「まあ・・慌てる事はないさ。たとえ、この身は最弱とは言え勝算がまったくない訳でもない」
そして、二人が事務所の外へ出ると案の定、二人の男が仁王立ちしていた。一人はラテン系の容姿をしたドレッドヘアーの男性。その

隣には圧倒的な存在感を放つ中華系の武者が控えていた。武者はとても大きな体躯をしており鮮やかな紅髪を後ろに二つに分け結い、赤を基調にした鎧を纏っている。
ドレッドヘアーの男性が出て来た奏達に対し口を開く。
「へえ・・こっちの誘いを蹴らずに出て来るとは中々に剛毅じゃねえか。取り敢えずは初めましてだな、俺はアレックス・マリオン。こっちは俺のサーヴァントのランサーだ」

ランサー・・・選りにも選って三騎士クラスか・・それにしてもアッサリとクラス名を明かして来たな。それだけ自信があるって事か。

今度はランサーの方が口を開く。
「次は貴様らが名乗るのが礼儀と思うが？」
その鋭い一瞥をまともに喰らった奏は内心、気圧された。

凄い迫力・・・ッ！改めて思い知るが、これが英霊（サーヴァント）かッ！！

奏は敵の覇気に呑まれそうになりながらも名乗る。
「俺は鳴宮奏。こっちはサーヴァントのキャスターだ」
すると、ランサーはフンッと鼻を鳴らして吐き捨てた。
「選りにも選って、最弱のキャスターとは・・・・つまらん」
すると、キャスターも挑発するように笑った。
「ふっ、早計は余り、感心しないな。如何にこの身は最弱でも戦いようがない訳ではない」
「ほう・・」
ランサーが値踏みするような眼で見るとキャスターはその威圧がこもった視線を物ともせずに奏に言った。
「マスター、宝具の開帳を許して貰いたい」
その言葉に奏は静かに頷く。すると、キャスターは右手をかざして魔力を放出し宝具を具現化させる。その形が露わになった時、この

場にいる全員が眼を疑った。なんと、それは剣だった。一振りの剣は岩に刺さった状態でこの場に具現化されたのだ。

この剣はさっきの夢で見た・・・

そう、この剣はまぎれもなく奏が先程、見たキャスターの過去夢で少女が抜いたであろうあの岩に刺さった剣であった。
それを見た一同は驚愕する。白兵戦とは無縁に等しいキャスターが剣の宝具を持つなどと・・・！
「これぞ我が第一の宝具『勝利すべき黄金の剣』！！さあ、マスターよ。この剣を取れ！」
「え？俺がッ！？」
奏が思わず面を喰らうとキャスターは大声でさらに促す。
「早くッ！」
その声に奏は半ば、自棄になってその剣・・勝利すべき黄金の剣の柄を握り岩から引き抜いた―すると、その剣から大きな魔力が魔術回路を通して身体中に流れて行くのを感じた。

この宝具・・・もしかして―

奏の考えを読むようにキャスターが肯定する。
「そう・・これは私自身が使う事を想定された宝具ではない。この宝具の真の意味はマスターとの契約を結んだ後にこそある」
「つまり―」
奏は勝利すべき黄金の剣を手にランサー目掛けて突撃する。その無謀とも言える行動にアレックスもランサーも面を喰らうが、それも一瞬だった。奏は人間とは思えない速さと剣戟を繰り出しランサーはそれを紙一重で避けた。
「マスターを強化する為の宝具って事か・・・一応」
奏は相も変わらず気のない声だったが、その戦闘態勢は微塵の隙も

なかった。それを見たランサーはこれは決して一筋縄では行かない事を察した。
「主よ、こちらも宝具を開帳するぞ・・・あの小僧・・宝具で強化された事は勿論だが、あの小僧自身の力量もまた、侮れん」
「へいへい、あんたの方が戦闘のプロだ。任せるよ」
アレックスは溜息を付きながらも渋々了解した。ランサーは右手にその巨躯に相応しい巨大な戟を具現化させた。

あれって方天画戟って奴か・・・と言う事はあのランサーの真名って・・・

「考え事とは余裕だなッ！」
そこで奏の思考は途切れた。ランサーの凄まじい突きが迫って来たからだ。しかし、奏はそれを考え事の途中だったにも拘らずそれを読んでいたかのように避けた。これにはランサーもかなり、驚いたのか眼を剥いている。奏はその隙にと剣戟を繰り出すが、勿論、そう易々と殺らせる程、ランサーは甘くはない。忽ち戟をその刃に合わせる。
そこからは凄まじい剣戟の打ち合いだった。随所に火花が飛び散り、互いに際どい一撃を何度も繰り出して行く。その場に他のマスターやサーヴァント達がいたら皆一様に驚愕したろう。何せ、生身の人間が如何に宝具の助けがあるとは言え、サーヴァントと互角に戦うなどと・・・
しかし、一番に驚愕しているのはランサーの方だった。

この小僧・・・多分に宝具の助けがあるとは言えこの俺とここまで打ち合えるとは・・・ほぼ互角・・いや、僅かに俺を圧してすらいる！
それにこ奴の動き・・まるで、俺の繰り出す斬撃の一つ一つを見透かしているかのようではないかッ！？

そう見透かしているかのようではなく現実に見透かしているのだ。
これぞ奏が頭脳に代わると言った奏自身の起源『予知』であった。
奏はそれによって対象や物事の事象を先取りする事によってあらゆる捜査を遂行し時には障害に成り得る人間を打ち倒して来たのだ。
おまけに彼は身体の強化に特化した魔術師でもある。さらに、そこへキャスターの宝具による強化補正によって今の奏の戦闘力はサーヴァントに迫る物となった。
「チッ！調子に乗るなッ！！」
ランサーは一際大きな力で戟を振るい奏を薙ぎ払う。奏は後ろに吹き飛ばされながらも綺麗に着地する。
一方、ランサーは一層に鋭い視線で奏を射抜く。
「小僧・・・遊びは終わりだ」
そう言った途端に戟の形状が弓の形に変化した。
「なッ！」
奏が面食らっているとランサーは殺気がこもった声で弓へと変化した己の得物をつがえながら言った。
「小僧・・・お主の技量、人間風情の身でよくぞ、ここまでと誉めてやる。だが、貴様ができるのも所詮はここまで・・・我が宝具『軍神五兵（ゴッドフォース）』のスキル・・必中無弓（ゆみ、きそうかちなし）によって引導を渡してくれる」
そう告げた瞬間にランサーは矢を放った―

第二幕

弓と化したランサーの宝具軍神五兵(ゴッドフォース)から巨大な弓矢が常人などでは到底、眼にも止まらぬ速度で放たれた。
奏は己の起源『予知』と身体強化魔術を最大限にまで酷使する。巨大な弓矢がかなり速めのスローモーションとなって奏の視界に映る。
奏は宝具勝利すべき(カリバーン)黄金の剣を突きの構えで繰り出し弓矢の軌道をギリギリで逸らし、弓矢は近くの建物に直撃した。
ランサーはそれを見て感歎の声を上げる。
「ほう・・・今のは紛れもない必殺の一撃だったのだが・・・つくづく楽しませてくれるな人間。だが、二度目も同じように出来るか？」
そう言ってランサーは再び矢をつがえる。奏も再び、臨戦態勢を取る・・・が、その戦いを一つの声が押し止めた。

「おいおい、いけないなあ。こんな街中で戦闘なんて・・・・公衆の面前において魔術の行使はご法度のはずだろう？」
その場にいた四人はその声のする方を振り向くとそこには貴族然とした服装に身を包んだアッシュブロンドの短髪の男がいた。そして、隣には白銀の鎧を纏った如何にも騎士然とした青年が控えている。
恐らく彼のサーヴァントなのだろう。
一方、アレックスはその男を見るや・・・
「アンシェルッ！テメエまでこの戦いに」
「アレックス・・・それはこちらのセリフだよ。落伍者である君が無謀にも聖杯を求めようなどとはね」
アッシュブロンドの男―アンシェルが嘲笑も露わに言うとアレックスは乱暴な身振りで怒鳴る。
「うるせえッ！そっちこそボンボンが実戦に出ようなんて笑わせるぜ・・・いっそここで首を落としてやろうか？ああッ！？」

すると、アンシェルはほとほと呆れ果てたと言わんばかりの声で言った。
「その前に君達自身の首が監督役や他のマスター達の手によって落とされるとは考えないのか？この惨状を見たまえ」
そう促され自分達の周囲を見ると先程の弓矢を別方向に逸らした結果、逸らされた弓矢が直撃した家が全壊していた。それに耳を澄ませば周囲も騒ぎ始めていた。
アレックスも舌打ちしながらも漸く自分の迂闊さに気付きランサーに霊体化を命じてその場を後にした。そして、場には奏とキャスター、アンシェルと彼のサーヴァントのみが残った。
アンシェルは奏を値踏みするように見つめた後に口を開いた。
「初めましてだね・・鳴宮奏くん。私はアンシェル・ジルヴェスター。こっちは私の従者（サーヴァント）であるセイバーだ」
アンシェルの紹介を受け白銀の騎士―セイバーは自らも名乗る。
「お初にお目に掛かります。アンシェル様の従者を務めるセイバーと申します。どうか主の良き好敵手で在らん事を」
「は・・はあ」
奏は思わず間の抜けた返事をしてしまう。だが、アンシェルは含み笑いを浮かべながらも言葉を続けた。
「それにしても先程の戦闘だが、実に恐れいったよ。宝具の助力があったとは言えサーヴァント相手に・・それもあの呂奉先を相手に互角に渡り合うとは・・・」
「あんたも気付いてたのか？ランサーの真名を」
「それは勿論、あの方天画戟の宝具を見て気付かない方がどうかしているだろう」
その口振りだと今まで自分達の戦いを見物していたらしい。
「諌めておいてその実は見物か・・・狡猾だ事で」
奏が皮肉を込めて言うとアンシェルは意にも介さず笑いながら、いけしゃあしゃあと言った。
「ははは、お陰でかなり興味深い物を見れたよ。なあ、そう思う

だろうセイバー」
突如、話を振られたセイバーは僅かに眉を動かすが、何も語らない。
奏はそれに少し違和感を感じたが、アンシェルはそれで話は終わりだと言わんばかりに背を向けて最後にこう言った。
「それでは私はこれで失礼するよ。そして、鳴宮くん・・・気を付けたまえ。此度の第四次聖杯戦争は過去の聖杯戦争とは何もかもが違う」
その言葉に奏とキャスターが訝るとアンシェルは口元をにたりと歪めて告げた。
「私の調査で本来、七人のみに配当される令呪が私達を含む百人の魔術師に配当された事が判明した」
「は？」
奏は思わず間の抜けた声を出した。『何の冗談だそれは？』と言わんばかりに・・・だが、アンシェルは確信がこもった声でさらに続けて言う。
「つまり、百騎もの英霊（サーヴァント）がこの冬木の地に召喚され覇を競い合う・・・今だかつてない文字通りの大戦争となる。当然、それだけの数の英霊達が戦うのだ。被害や爪痕は冬木の地だけには止まるまい。日本全体・・・いや、下手をすれば―」
「ちょと待て。在り得ないだろう、そんなの・・・いくら聖杯が『万能の願望機』だからってそんな数の英霊を現界させるなんて事ができるわけ・・・」
「フッ、在り得ないかどうかは君自身も直に分かる事だろう・・・尤も君達がそれまで生き残っていればの話だが。それでは次は戦場にて相見えるとしよう」
それだけ言うとセイバーを伴い去って行った。
「マスター、私達も行くとしよう。残念だが、君の家に戻る事はもうできない。彼の言が本当ならば君の周囲が危険に晒されよう。それに彼が言っていたように直にここへ人が来る」
「ああ」

キャスターに促され奏はその場を後にしながらもアンシェルの言葉を頭の中で反芻する。

百騎もの英霊（サーヴァント）が殺し合う？笑えない冗談だな・・・・

それと同時刻・・・

「で・・どうだセイバー。アレはやはり、本物なのか？」

アンシェルが問うとセイバーは簡潔な調子で答える。

「はい、ランクこそ劣化していますが、アレは紛れもなく私のかつての王が持つべき宝具。少なくとも、キャスターが所有する謂れなどない宝具です」

すると、アンシェルは面白そうな顔になって言った。

「ふむ・・・かつて、騎士王の臣下だった君としては心外なのかね？サー・ガウェイン」

「いえ・・・ただ、解せないと言うだけの事です我が王。私は貴方の剣。そこに余分な感傷など一切ありません」

セイバーは理路整然と答える。ますます面白いと言わんばかりにアンシェルは笑みを広げた。

「ふむ・・・それで君はあのキャスターに見覚えがあるのかね？」

「いいえ、初めて見た顔です。私の知る限りにおいて円卓の騎士団にもあのような者はおりませんでした」

その答えにアンシェルは一瞬、考え込むような顔になるが、それもそこまでだった。すぐに決意に満ちた顔になって己の騎士（サーヴァント）に告げる。

「そうか・・・まあ、その件はいい。それよりもこれからの戦略を練らねばなるまい」

「御意」

セイバーはそう答えたが、内心は驚愕と共にある懸念を抱いていた。

あのキャスターに見覚えがない・・と言うのは嘘ではない。事実、

私はあのような者の顔は知らない。だが、あのキャスターの雰囲気と佇まいは誰かを思い出させる・・・
いや、そもそもアルトリア様以外であの剣を宝具として持ち、且つ魔術師(キャスター)のクラスと来れば該当する英霊など私の知る限りにおいてはたった一人しか・・・いや、まさかとは思うが・・・

セイバーは疑念を抱きながらも考えを打ち消し主の後に従った。

「まず、これからの戦いを勝ち抜いて行く為に先程、君が使った宝具について説明しておく」
拠点を変えやっと、落ち着いた時、キャスターがこう切り出した。
「ランサーとの戦いで君が使った宝具『勝利すべき黄金の剣(カリバーン)』は私が使う事を想定された宝具ではないと言ったが、これには語弊がある」
「と言うと？」
「要するにアレは本来、私が所有する宝具ではない。アレは元々、ある剣の英霊が持つべき宝具なのだ」
「それじゃあどうして、魔術師の英霊であるお前がそれを持ってるんだよ？」
尤もな問いだ。白兵戦向きではないキャスターのクラスが剣の宝具を持つなんて道理が本来あるはずもない。
「まあ、私もあの剣には多少なりとも縁があったのでね。一応は私の宝具として昇華されたのだろう。それはそうとアレの宝具としてのスキルだが、第一にマスターである君が武器として使う魔術礼装となる事。第二にそれによって一時的に身体能力などがサーヴァントにも迫る程に強化される。この二点だ。もっとも、それとて本来の用途ではない。故に宝具としてのランクも本来よりも劣化しているし何より制限時間(リミット)も設けられている」
「制限時間(リミット)か・・・もっともだな。そんな都合のいい物であるはずもない・・・で、その時間はどれくらいだ？」

「ジャスト五分。先程はかなり、ギリギリだった」
キャスターがキッパリと答える。すると、奏は苦笑して言った。
「要するに俺はアンシェルに救われたって事だな・・あのまま使っていたらどうなっていた？」
「恐らく宝具から流れ込んで来る魔力の圧力に魔術回路が耐え切れずオーバーヒートを起こしていただろう」
「そう言う事は召喚された最初に言ってくれ・・・」
アッサリと今頃になってそんな事を言ってくれる己のサーヴァントに奏は頭をかきながら嘆息を付く。
「この際に聞くが、お前は他にどんな宝具を持っているんだ？」
「秘密だ」
キャスターは意地悪く即答する。これには流石の奏も苛立った声で詰問する。
「おいッ！お互いの命がかかっているんだぞ！」
「教えた所でどうなる訳でもない。私の宝具は対魔力を持つ三騎士クラスにはほぼ効かないし、まあ、とっておきの宝具なら話は別だが、とっておきだけあってあれは魔力の消費量が激しい・・その上、一度でも使えば私の真名も瞬く間に敵に知れよう。ましてや、此度は七騎所か百騎ものサーヴァントが参加するともなれば先は長い。少なくともこのような序盤で手の内を晒すべきではない」
「そりゃそうだが・・・」
「とりあえず、今日は眠るといい・・明日からは戦争だ」
今日ばかりは己のサーヴァントの言う通りにするかと奏は再び、眠りに付く事にした。そして、奏が寝静まった後、キャスターは一人佇むように呟いていた。
「百人の魔術師に百騎のサーヴァントか・・・やれやれ、何やらきな臭くなってきたな・・・」
その頃、ある人気のない納屋では一人の男がサーヴァントの召喚に臨もうとしていた。

男の名は間桐雁夜。本来なら御三家の一角、間桐家の頭首となるはずだった男・・・だが、間桐の陰惨な魔導を嫌い家を出奔した。その後は普通の日常を手に入れるはずだったのだが、雁夜自身でも何故かは分からないが、独学且つ独自に魔術の修練を積み始めた。何故かは雁夜自身も分からない・・・だが、その時は間桐の家を離れて尚、そうした方がいいと思えたのだ。
そして、今・・その直感は決して間違いではなかった事を雁夜は知る。
幼馴染でありずっと自分が想いを寄せて来た女性・・遠坂葵。その娘である桜が選りにも選って間桐の家に養子に出されたと言う・・あの糞爺の下に・・・ッ！
間桐の家を出た時、自分は余りにも無力だった・・・だが、今は違う修練は元より経験も積んだ。さらに言えば己の右手に現れた令呪だ。聖杯戦争の参加者に配当されると言う魔力の塊・・これならサーヴァントを召喚し使役できればあの化け物を・・・間桐臓硯を倒し桜ちゃんを救う事ができるかも知れないッ！

雁夜は藁にも縋るように召喚の為の魔法陣を描き詠唱を唱えた。
「誓いを此処に。
我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」
そこで雁夜は呪文を付け足す。いくら修練を積んだとは言え時臣と言った他の参加者に比べたら自分の魔術師としての技量は些か劣る。まして、それが聖遺物なしとなれば尚の事。ならばステータスの大幅な底上げがどうしても必要だった。
「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者―」
いよいよ召喚は大詰めだ。雁夜はさらに力を込めて最後の一節を唱える。
「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ―！」

暴風と閃光が納屋を包み静寂が訪れるとそこには禍々しいまでの漆黒の魔力に包まれた黒甲冑（フルプレート）に身を包んだ大柄の騎士が立っていた。

やった・・成功だッ！

雁夜は召喚が成功した事に安堵の笑みを浮かべたが、次の瞬間にその顔は驚愕へと染まった。何故ならば―

「今再び・・・問おう、貴殿が私のマスターに相違ないか？」

言葉など知らぬはずの狂戦士（バーサーカー）が口を開き問うていた・・・・

第二幕（後書き）

雁夜さん・・かなり改竄しています・・本当にすいません。

第三幕

「今再び・・・問おう、貴殿が私のマスターに相違ないか？」
一瞬、雁夜は何を言われたか分からなかった。否、何を言われたかは勿論、分かっている。自分が己が主かと問われたのだ。それはサーヴァントが最初に召喚されたならば必ずする問い掛け。おかしい事でも何でもない。
だが、現実におかしい。自分は予めバーサーカーを召喚する為の詠唱を捻じ込んだはずだ。そして今、自分の頭に流れ込んで来る眼の前にいるサーヴァントのステータスは彼をバーサーカーだと如実に語っていた。
しかし、バーサーカーとはサーヴァントの理性と言語能力を喪失させる事で能力を底上げさせるクラスのはずだ。にも拘らず、眼の前のサーヴァントはハッキリとした言葉で自分に主なのかと問うた。
それも理性すら感じさせる声で・・・
「どうした・・貴殿が私のマスターではないのか？」
再び、サーヴァントに問われ雁夜はハッとなって答えた。
「あ・・ああッ！俺がお前のマスターだ」
「承知した。これにて契約は成立された。サーヴァント・バーサーカー、これより貴殿の剣となり盾となって御身を聖杯へと誘わん」
契約が受理された事を確認した雁夜はそこでバーサーカーに訊ねた。
「なあ、お前がバーサーカーと言うなら何故、お前には理性があるんだ？それに、お前はさっき始めに『今再び』とか言ったよな。それってどう言う意味だ？」
すると、バーサーカーから返って来た答えはさらに雁夜を驚愕させる物だった。
「それは私が此処と似て非なる並行世界において貴殿に召喚された事があるサーヴァントだからだ」
「なッ！」

雁夜が開いた口も塞がらないと言う顔になるとバーサーカーはさらに続けた。
「私に何故、理性が残っているかについては私自身にも答えかねる。ただ、以前の並行世界において私は紛れもない狂戦士（バーサーカー）として召喚され貴殿の魔力を好き放題に吸い取って狂気の赴くままに戦い敗れた。そして、貴殿もまた、その狂気に染まりとうとう、貴殿の想い人を手に掛けると言う破局を迎えた。」
雁夜は今度こそ眼を大きく見開き怒鳴った。
「嘘だッ！！お・・俺が・・葵さんを手に掛ける？俺が・・？そんな馬鹿な事があって堪るか！」
雁夜は我を忘れ怒鳴り続ける。それに対しバーサーカーは冷静に言った。
「事実だ・・故に雁夜。私は貴殿に問わねばならない。貴殿が何故にこの戦いに身を投じるのかと言う事を」
その諭すような口調に雁夜はある程度、落ち着きを取り戻し答えた。
「俺は間桐に囚われた桜ちゃんを救う為に・・・」
雁夜がそこまで言うとバーサーカーが先を遮るようにこう言った。
「そこまでは確かに良いだろう・・だが、その先はどうだ？」
「その先って・・・それは・・・・」
雁夜はその時、脳裏に一人の男の姿を思い浮かべた。遠坂時臣・・・自分の娘を地獄へと突き落とし葵さんを哀しませた張本人ッ！
かつてはこの男に期待した事もあった。この男なら葵を幸せにしてくれるのではないかと・・だが、今となってはッ！
雁夜が忌々しげに顔を歪めるとバーサーカーはその内心を読んだかのように必死で言葉を続ける。
「雁夜、サーヴァントの身で出過ぎた事と承知で言わせてもらう・・・それでは誰も救えない。その桜と言う御子も貴殿の想い人も・・そして、貴殿自身すらも」
「何を根拠に・・・」
雁夜は睨むように己のサーヴァントを見据えるとバーサーカーは静

かな声で続けた。
「私もかつて、貴殿と同じく夫君を持つ女性を愛した」
その言葉に雁夜は少し、眼を見開いた。
「確かに貴殿とは事情こそ異なるが、私もその女性を救わんと行動した。だが、その結果は・・・・悲惨だった」
バーサーカーは最後の部分を力が落ちたような声で言った。自然と雁夜もその声に耳を傾ける。
「結局の所、私がした事は彼女を慚愧の淵に突き落とした挙句に止まらぬ涙を流させただけに過ぎなかった・・だからこそ雁夜・・・貴殿もこのまま突き進めばその先に待っているのは―」
「分かっているさ・・・」
今度は雁夜がバーサーカーの言葉を遮るように口を開いた。そして、こう続ける。
「あんな奴でも葵さんにとっては大事な奴で・・・凛ちゃんや桜ちゃんにとっては大好きな父親だって事くらい分かっているさ・・・・」
雁夜はどこか憑き物が落ちたように語る。それをバーサーカーは静かに聞いている。
「それに、お前が言っている事も真実だと言う気がする・・・いや、お前の話を聞いてあの夢が正しく真実だと確信できた」
「夢？」
バーサーカーは怪訝な声で問うと雁夜は表情に翳を落として言った。
「俺が間桐の家を出た後も魔術の修練を独自に積んで来たのもそれが理由さ。家を出た時はもう魔術なんて物に関わる気は一切なかった・・・だけど、それから妙な夢を見るようになった」
「それは如何なる夢なのか？」
バーサーカーが問うと雁夜は重い声で答える。
「悪夢・・だよ。よく覚えてはいないけど、内容はお前がさっき言ったような物だった気がする。その時、俺は無力で何もできやしない癖にジタバタして・・・自分勝手な気持ちで足掻いて・・・結果

はお前が言ったような物だった・・・」
それから重い沈黙が流れるが、暫くして雁夜の方から口を開く。
「なあ、バーサーカー。お前は俺がそう言う未来に向かう事を防ぐ為に態々、この世界でも俺の召喚に応じてくれたのか？」
「確かにそれもある。あの結末はサーヴァントでありながら諫言一つできなかった私にも非があること故に・・だが、それだけではない」
「何だ？」
雁夜がオウム返しに訊ねると・・・
「この世界においても召喚されるであろうあのお方の願いを阻む為に召喚に応じた」
「それはお前にとって大事な人なのか？」
「ああ、私が唯一無二、剣を捧げた唯一人の主君だ。あの方はその潔白さ故に大きく誤った願いを聖杯に請おうとしている。故にお止めする。それが私の願いだ」
それを雁夜は穏やかな顔で聞くと再び、口を開いた。
「バーサーカー、俺の願いを告げる・・・」
その言葉にバーサーカーは身構えてその言葉の続きを待つ。
「間桐臓硯を倒し桜ちゃんを救う・・そして、時臣の野郎をぶん殴るッ！だが、時臣は殺さない。桜ちゃんも時臣も生きて葵さんの下へ返す！」
それが間桐雁夜の答えだった。その答えにバーサーカーは冑を取る。すると、そこには鮮やかな長髪が垂れ凛々しい騎士の面差しが露わになる。そして、バーサーカーは雁夜に対し臣下の礼を取って応える。
「承知した雁夜。今より貴殿が我が王（マスター）だ。サーヴァント・バーサーカー・・・否！このサー・ランスロット、御身の願い必ずや成就せん事を盟約にて誓う！」
ここに新たな主従が盟約を結んだ・・・・

そして、話は今から二カ月前に遡って・・・此処にも新たな主従が盟約を結んでいた。

「おい、ちょっとあんパン買って来てくれる？」
「じゃあ俺は煙草ね！」
「俺はポテチ！あとコーラも」
「え？」
如何にも柄の悪そうな生徒達が一人の気弱そうな男子生徒に寄って集って買い出しを強要して来る。如何にも漫画のような一場面。その被害者は柔弱そうな面差しとソバカス面に縁眼鏡をかけた少年だ。彼の名は紫之寺神威（しのでらかむい）、高校一年。家族構成は両親と下に弟が一人・・・どこにでもいる最下層の高校生・・・
「あ・・あのお金は？」
神威がオズオズと言うと途端に生徒達にジロッと睨まれる。それに気圧され・・・
「ですよね・・・」
と卑屈笑いをしながら引き下がる。我ながら情けなかった・・・・神威はトボトボと言われた買い物を全て行い学校へと戻る・・その道中、神威は溜息をついていた。

僕は一体、何をやっているんだろう・・・大して成績が良い訳でもない僕が必死に勉強して折角、入った高校なのに結局、ここでもあ言う連中の小間使いなわけで・・・中学の時と全く変わっていないわけで・・・これから高校の三年間もずっとこんな調子で過ごして行くのだろうか？
それで良いんだろうか？

そんな事を考えながら歩いていると一人の男とすれ違った。その男は白のダウンジャケットを羽織った青年で顔はフードに覆われて分からなかったが、その陰からみえる鋭い視線を神威は一身に受け身

が竦んだ。
男はそのまま何も言わずすれ違っていった。
「何だろう・・あの人？」
神威は思わずその後ろ姿を見つめていたが、腕時計を見て慌てた。
「うわっ！いけない・・・もう昼休みは終わりだ。急がなきゃッ！」
そうして学校への道のりを急ぐ・・が、そこへ着いた彼が眼にしたのは想像を絶する大事態だった―

学校が・・・・燃えていた。さらに校庭には夥しいまでの生徒や教師達の惨殺死体が転がっていた。中には手や首、胴が断たれた者もいる。内臓が飛び出した者もいる・・・さらに驚くべき事はそれらの死体は皆、腐っていた。恐らく殺されてまだ、間もないと言うのに・・・

なんだ・・・これ？

これ程の大惨事にも拘らず神威は現実に頭が追い付いていなかった。その凄惨な虐殺劇を前に吐きもせずただ、呆然と見つめるのみ―だが、そのような時間を彼に許してくれる程、世界は優しくなかった。そこへ一組の男女が神威の前に現れた。一人は神威と同じくらいの少女でゴスロリ色の強い衣装を身に付けている。そして、もう一人は甲冑に赤のマントを羽織った大柄の青年でネットリとした黒髪に顔立ちはかなりの美丈夫で猛禽類を思わせる黄色の眼はまるで、獲物を探しでもするかのようにギョロリとしており、その右手には赤と黒を基調にした禍々しい形の大剣を持っていた。
そして、少女は神威を見て酷薄な笑みを浮かべた。
「あら？この学校の生徒かしら。だとしたら気の毒ね・・・ノコノコと学校に戻って来なきゃ難を逃れられたでしょうに」
その言葉が神威には死刑宣告のように聞こえた。いや、現実にこれ

は死刑宣告なのだ。この惨状を作り出したのがこの二人である事は彼らの出で立ちや雰囲気からも明白だった。
神威は一刻も早くこの場を去りたかったが、身体が言う事を聞かない。恐怖に震えるばかりで身体のあらゆる機能が役立たずとなっていた。それにこれは勘だが、逃げても無駄だと神威は小動物の如き本能で悟っていた。
「後で騒がれても面倒なだけだもんね、よし、セイバー！・・・・殺しなさい」
少女は冷徹に隣の青年に命じた。
「心得た。我が主よ」
青年は獲物を与えられた事を喜ぶように右手の大剣を神威目掛けて振り下ろした。

その間、神威の時間は白昼夢のように止まり眼の前に振り下ろされる大剣が少しづつ神威に近づいて来る。

ああ・・僕の人生はここで終りなんだ。折角、高校に入れたのに・・・呆気なかったな僕の人生。
けど・・・本当に？これで終りで・・・いいのかな？正直に言ってまだ、終わりたくはない。だって僕の人生はまだ、始まってすらいない・・夢だってそれなりに持っているし・・女の子とだって・・・出来るなら交際したい。
なのにこんな所で終わるのか？いやだ・・・

そこで漸く神威は心の大鼓を叩いて逆る。

僕はまだ、何にもやれていないし・・と言うかそれを見つけてもいない！こんな終わり方は絶対に嫌だッ！！僕は・・・・僕はッ！
僕はまだ、何も生きていないッ！！

その瞬間に彼の右の甲に鋭い痛みが走ると共に血の色に染まった三画の聖痕が刻まれる。それを見た少女は驚愕に眼を剥く。
「なッ！こいつも参加者だって言うの？でも、ご生憎様ね・・今更、サーヴァントを呼ぶゆとりなんてない―ッ！」
そう言い終わらぬ内に神威の眼の前に魔法陣が突如として発現する。それは紛れもなく・・・
「ま・・まさか、詠唱すらしていないのに・・・サーヴァントの召喚をッ！」
閃光と暴風が周囲を巻き込んで行く。それが収まった後、その余波で起こった土煙りから快活な声が響き神威に言った。
「うむ！死を眼の前にして尚、強く生きたいと願うか！見事だ、よくぞ言った名も知らぬ路傍の者よ！その願い、世界が聞き逃そうとも余が確かに感じ入った！」
そして、土煙りが晴れ、眼の前には見事な金髪に快活さを感じさせる翡翠の眼に赤を基調にした何気に露出度が際どい服を纏った少女が立っていた。そして、少女は高らかに言った。
「拳を握れ、顔を上げよ！命運は尽きぬ！何故なら、そなたの運命は今、始まるのだから！」
その少女に対する神威の第一印象は・・・

か・・可愛い・・・

そう場違いながら神威は少女に見惚れていた。事実、少女の容姿は整っている。スタイルも均整が取れている。間違いなく美少女の部類に入るだろう。
そして、少女はズイと神威に近づいて問うた。神威は思わずギョッとする。
「答えよ、そなたが余の奏者（マスター）か？」

はい？マスター・・・？

突然、少女にそう問われ神威は呆然となる。すると、少女はさらに顔を近づけて問い掛ける。
「どうした？早く、答えよ！そなたが余の奏者（マスター）なのだな？」
その強引な押しに思わず神威は・・・
「はは・・はいッ！」
「うむ・・特別に許す！余はサーヴァント・セイバー！そなたに余の奏者（マスター）たる栄誉を与えよう！」
ここに半ばマッハスピードで主従の盟約が交わされた。
その時、先程のゴスロリ少女が金切り声を上げる。
「ちょっと！人を無視して勝手に盛り上がらないでくれる？おまけに『セイバー』ですって？ふざけんじゃないわよ！セイバー！この偽物をこのモヤシ諸共、殺しなさいッ！」
「心得た・・・クククッ、同じセイバーを名乗ったからには精々、楽しませてくれるのだろうな小娘？」
男性のセイバーはあの禍々しい大剣を神威達に向ける。それから守るように神威のセイバーが立ち塞がり、こちらは赤を基調にしたかなり、奇妙なフォルムの剣を構える。
「奏者、任せよ。一蹴に附してくれる」
そう言って少女の剣士（セイバー）は敵へと向かって行った。

この日を境に神威は変わらない日常から変わらざるを得ない凄惨な戦場へと身を置く事となった。

第四幕（前書き）

お待たせしました・・・・

第四幕

「はあああああああっ！」
セイバーと名乗る少女が同じくセイバーと名乗る青年に剣戟を繰り出し青年もそれに同じく大剣で受ける。
「クククッ！女だてらにとは良く言うが、中々やるな」
青年がそう賛辞を送ると少女も不敵な笑みを浮かべて言った。
「そなたもゲテモノの類にしては中々に巧みな技を使うではないか」
二人は互いに楽しむように剣戟を交わす。その様子を神威は呆然とした眼で見ていた。二人の男女が剣を手に打ち合っている。現代とは余りにそぐわない・・要約すれば現実離れした光景を見ている事しかできなかった。
一方、ゴスロリの少女は相も変わらず金切り声を上げて己のセイバーに命じる。
「ちょっと、セイバー！何そんな偽物相手に遊んでいるのよッ！宝具の開帳を許すわ。さっさとけりを付けるのよ！」
すると、青年のセイバーは喜色の浮かんだ顔で少女のセイバーに改めて己の大剣を突き付ける。
「と言う事らしいのでな・・・実に名残惜しいが、殺りに行かせて貰う。我が宝具『黒血の毒薔薇（サングリル・デ・カンタレラ）』でなッ！」
すると、青年のセイバーが持つ大剣が禍々しい魔力を纏う。少女のセイバーは己の剣を手に構える。黒血の剣戟が少女のセイバーの剣を掠める。すると、少女の剣はその掠めた箇所を腐食させ融けていた。
「なんと！」
これには少女のセイバーも驚きに眼を見開く。
「クククククッ！如何かな我が秘蔵の毒の味は？」
その言葉と先程の宝具の何に少女のセイバーはこの青年のセイバーの真名を悟った。

「成程。黒血の毒薔薇（サングリル・デ・カンタレラ）・・・この宝具の名で瞬時に悟るべきであったな。イタリアのもう一人のカエサルにして毒の枢機卿・・チェーザレ・ボルジア。よもや、そなたの如き奸物が最良のサーヴァントたる剣士（セイバー）のクラスで現界しようとはな」
そう・・このセイバーの真名はあらゆる政敵を秘蔵（カンタレラ）の毒を持って粛清して来たローマ教皇の寵児チェーザレ・ボルジア！
「如何にも、我が真名はチェーザレ・ボルジアだ」
青年のセイバー・・・否、チェーザレも素直に認める。だが、彼のマスターであるゴスロリ少女は一層、金切り声を上げて激昂する。
「ちょっと！あんた何を勝手に真名を認めてんのよッ！否定しなさいよ！」
それに対しチェーザレはあっけらかんに言った。
「仕方あるまいリオン。宝具を開帳すると言う事は真名を自ら明かす事と同義だ」
彼の口振りからどうやらゴスロリ少女の名はリオンと言うらしい。
しかし、チェーザレは余裕ある笑みで己のマスターに言う。
「なに大した問題ではない主よ・・・こ奴らをここで仕留めれば済む話だッ！」
その言葉と共にチェーザレは渾身のスピードを持って突きを繰り出して来る。
それを見て真名がバレた事で焦っていたリオンもいけると踏んでいた。

ふふふ・・・そうよ。あたしのセイバーがこんな女に負けるなんて在り得ない！何っててたってチェーザレ・ボルジアは剣士（セイバー）、槍兵（ランサー）、騎（ライダー）乗兵の三つのクラスに該当する程の強霊なのよ。それにしても・・・・

と、そこでリオンはマスターに与えられるサーヴァントのステータスを読む能力を通して自分の剣士（セイバー）と戦うもう一人の剣士（セイバー）を見る。

この女・・どこの英霊か知らないけど、どうやら『セイバー』だと言うのは本当らしいわね・・・同クラスのサーヴァントが二体も存在するなんてどう言う事かしら？まあ、でも所詮はチェーザレの敵じゃないわ。と言うかそれ以前にこの女を召喚したモヤシにしたって真っ当な魔術師とは言い難いみたいだしね・・・

リオンはサーヴァント同士が戦っている最中、未だに呆然としている神威に眼を付ける。マスターと言う繋ぎがなければサーヴァントは現界を維持できず何れは消滅する。
特にこれは勘だが、あの女セイバーのマスターとなった男子生徒はそもそも魔術と言う知識すら欠落している。恐らく令呪が刻まれた事で突発的に魔術回路が開いた偶発的な召喚だったのだろう。ならば―
「先手必勝ってねッ！」
リオンは自身の魔術礼装である左手の薬指に嵌めた指輪を神威に向かってかざす。それを見たセイバーは―
「奏者ッ！」
と、すぐに駆け付けようとするもチェーザレの猛攻に対処するのが精一杯だった。その間にリオンは己の礼装を通じて魔術を発動する。
彼女の属性は風。故にその魔術による攻撃手段は風を幾重にも練った鎌鼬（かまいたち）！
リオンは魔術回路を起動させ凄まじい鎌鼬を発生させ神威に飛ばす―
「うわあああああああああああああああっ！！」
神威は突如、襲い来る風の刃に神威は腰が引けて自分の身を守るように両手を上げる。
「ハッ！情けない悲鳴と格好ね！じゃあそのまま死んじゃえェッ！！」
だが、そうはならなかった。咄嗟に上げられた神威の両手から強い振動・・いわゆる超音波が巻き起こり風の刃を逆に裂いた。

「なッ！そんな・・あたしの風の刃がッ！？」
リオンは信じられないと眼を剥く。しかし、当の神威すらも唖然としていた。
何だ・・・今の？僕、何かした！？
「奏者・・・」
彼のサーヴァントであるセイバーすらも唖然としていた・・が、そこをチェーザレに付け込まれる。
「殺った・・・」
間髪入れずチェーザレは猛毒の刃をセイバーのがら空きになった腹部に突きで入れる。
「しまっ・・・ッ！」
セイバーは覚悟を決めて眼を瞑りかけるも、その時・・・
「あ・・危ないッ！」
神威は思わず右手をチェーザレにかざし先程の超音波を喰らわせる。チェーザレはそれを己の宝具で受け、セイバーはその隙に離れ神威の傍まで下がった。
「ははははは！我が奏者はやはり最高だ！でかしたぞ」
セイバーからの賛辞に神威は未だに呆然としながらも答えた。
「は・・はあ・・それはどうも」
一方、思いもかけない反撃を喰らったリオンとチェーザレはギリッと相対する二人を睨み付ける。
「ど素人のマスターと思って侮っていたけれど・・・どうやら簡単には行きそうにないわね。セイバー、アレを使いなさい」
すると、チェーザレは眉根を寄せて言った。
「良いのか・・・このような場所で？この学校所かこの地区一帯が消し飛ぶ事になるが・・」
そう諫言されてもリオンは頷かなかった。
「構やしないわ。こんなど素人丸出しの奴にしてやられたまま退い

たら、あたしの面目は丸潰れよッ！やりなさいセイバー・・・第二の宝具の開帳を許す」
「やれやれ・・心得た我が主よ」
と、チェーザレも今だ嘗てない程の覇気を放出する。それに身構えるセイバー。
「奏者、来るぞッ！」
その言葉に神威はゴクリと生唾を飲み込む・・が、そこで突如、横槍が入った。
「はーい！両陣営共にそこまでです～！」
緊迫した空気に似つかわしくない声が飛び出て対峙していた四人はその声の方角へ眼を向けた。すると、そこには髪を二三に分け黒い聖職者風の服装をした青年がスマイル０円と言わんばかりの安っぽい笑顔を浮かべて立っていた。その青年をリオンは鋭く睨み付けて訊ねた。
「誰よ、あんた？こっちは見ての通り取り込み中なんだけど」
その声音は明らかに邪魔だから消えろと言う意味が込められていたが、青年は一歩も怯まず安っぽい笑顔を振りまきながら言った。
「いえいえ、そう言うわけにも参りません。私、聖堂教会から派遣されました袴田淳一郎と申します～」
その言葉にリオンは舌打ちする。自分達の行動をもう、監督役が嗅ぎつけて来たとは・・・
袴田は朗らかな声音でこう続けた。
「さて此度の戦闘ですが、今回、リオン・アルテイシア殿の公衆の面前に置いての魔術の行使並びにサーヴァントの使役・・・これらは明らかに魔術の秘匿に反する行いです」
すると、リオンは悪びれもせずに言い返す。
「サーヴァントの試運転よ。戦争が始まるんだから自分の持ち駒の能力を知りたいと思うのは当然でしょ」
「だとしても今回は度が過ぎます。これ程の死傷者を出した大惨事・・いくら我々の隠蔽工作でもこれでは全く意味がありません。おま

けに・・・魔術師でもない一般人をも巻き込むとは」
その言葉にリオンは苛立ちながら異を唱える。
「人聞きが悪い事言わないでくれる？勝手に令呪がそいつの手に刻まれてサーヴァントが独りでに召喚されたのよ。あたしが何かをしたわけじゃないわ」
その切っ掛けを作った張本人でありながらいけしゃあしゃあと言うリオンに神威も彼のセイバーも呆れて物が言えないと言う顔になった。
だが、リオンはそんな事は眼中にないのか袴田に話し続ける。
「それよりもあんたが教会の人間だって言うなら聞きたい事があるんだけど？」
「はて・・何をでございましょう？」
袴田は首を傾げながら問い返すとリオンは言った。
「私は今回の聖杯戦争で『セイバー』を召喚したわ。だけど、たった今、そこのモヤシが偶然に召喚したサーヴァントも紛れもなく『セイバー』なのよ・・・これってどう言う事？確か聖杯が英霊に用意するクラスは七つ。一度として一つの戦争に二騎のサーヴァントが同一のクラスで召喚されたなんて話聞いた事がないわよ」
神威は一人だけこの会話に追いていけなかった。

聖杯戦争？・・・サーヴァント？・・・クラス？一体、何の事？
だが、彼の隣に控える赤の騎士（サーヴァント）だけは二人の会話に真剣な眼差しで耳を傾けていた。
すると、袴田は含み笑いをして言った。
「それにつきましては何の心配もありません。クラスが重複するのは当然の事です」
「はあ？何言ってんのよあんた！」
リオンが答えになっていないと言う声音で言うと袴田はこう続けた。
「確かに聖杯が用意するクラスは七つですが、そのクラスを得る英

霊は一騎のみとは限りません。何しろ、今回は七騎所か既に五十二騎ものサーヴァントが現界いたしております。故にクラスがかぶった英霊がいたとしても何の問題もございません」
その言葉にリオンとチェーザレ・・そして、神威の隣にいるセイバーが絶句している。唯一人、状況が把握できていない神威はオロオロと周囲を見る。
一方、袴田は立て板に水と言った調子で喋り続ける。
「いやー、我々教会としてもてんてこ舞いですよ。何しろ七騎だけでも厄介なサーヴァントがこの上、五十二騎もだなんて・・正に世界大戦さながらの戦力が終結したと言う事ですからね」
「そんな馬鹿な事が・・・だって聖杯が呼び寄せられるサーヴァントは七騎が限度の筈でしょう？それが五十二騎？何の冗談よそれ」
リオンがそう言うと袴田はいえいえと首を振って言った。
「残念ながら冗談でもビックリでもないです。正真正銘紛れもない事実なんですよ。おまけに本来、呼び出す事は不可能な筈の東洋の英霊までもが召喚されている始末です。正直、我々の監督も行き届くかどうかすら微妙な所でしてね・・故にこそ参加者の皆様方には是非とも思慮のある行動を尚更に取って頂きたい・・と、言う所です～！」
すると、リオンは下唇を噛んで言った。
「ふん・・まあ、いいわよ。場もなんか白けちゃったし。今日の所は退いて上げるわ。行くわよセイバー！」
そう吐き捨ててリオンはチェーザレに抱き抱えられて共にその場を去った。
そして、その場に残った一組である神威とセイバーの少女に袴田は近づいて言った。
「さてさて、貴方方が今回、新たに参戦されたマスターとサーヴァントですね。先程も言いましたが、貴方方も思慮のある行動と戦闘をお願い致します。余りに騒ぎが大きくなると本当に我々の隠蔽工作も間に合わなくなりますので。平に平に」

しかし、そう言われても神威には何の事だかさっぱりだった。故に―
「あ・・あの参加者ってどう言う事ですか？」
そう問い掛けると袴田は安っぽい笑顔を無駄に振り撒いて言った。
「いやだな～！どう言う事も何も当然、此度の第四次聖杯戦争の参加者に決まっているじゃないですか～！」
「聖杯・・戦争？」
そのボンヤリしたような声に袴田は今度こそ眼を丸くして言った。
「もしかして・・・本当に何もご存知ない？聖杯の事も・・もしかして、魔術師の事すら？」
「は・・はい」
神威がすんなり答えると袴田は一瞬、間を置き再び、口を開いた。
「成程・・・リオン嬢が仰っていた通り本当に突発的な召喚だったわけですね・・・まあ、気の毒な事です。しかし、こうして令呪を宿しサーヴァントを召喚してしまった以上、貴方は紛れもなく此度の聖杯戦争に参加する魔術師（マスター）です。最早、無関係ではいられません」
キッパリと言う袴田に神威はさらに問い質した。
「あの・・そもそも、その聖杯戦争と言うのは何なんです？」
「よろしい。説明致しましょう・・・まず、聖杯戦争とは『聖杯』と言う万能の願望機を賭けて戦う魔術師達の闘争の事です」
その言葉に神威はますます眼を丸くする。
「魔術師・・・でも僕はそう言うんじゃ・・」
「何を仰います。そう思うなら貴方の右手の甲をよく御覧なさい」
袴田にそう指摘され神威は改めて自分の右手の甲に刻まれた三画の赤い刻印を見る。
「それは『令呪』と呼ばれる自身のサーヴァントへの絶対命令権です。三度までしか行使はできませんから、使うべき時はよくお考えください。と同時にこの聖痕こそが聖杯戦争の参加資格となり、これが刻まれるのは魔術師若しくは魔術回路を持つ者のみなのです。故にこそ現に貴方は先程の召喚によって魔術回路が開き魔術をも行使されたではありませんか？」

そう言われ神威は先程、リオンの風の刃を喰らいそうになった時、身を守るように上げた自身の手から超音波が発生した事を思い出す。

ひょっとして・・・アレの事？

神威の合点がいったと言う顔を見て取り袴田はさらに説明を続ける。

「ふむ、漸く納得なされたようですね。では続けますよ・・・先程も言いました通りこれは聖杯を巡る魔術師達の殺し合いです。魔術師達は各々英霊と呼ばれる人外の精霊を令呪によってサーヴァントとして使役し最後の一組になるまで戦う・・と、言う物です・・・理解できましたか？」

「は・・はい、何となく」

神威は徐に頷いて答える。

「恐縮です。そして、召喚されるサーヴァントの数は七騎。それぞれに剣士（セイバー）、槍兵（ランサー）、弓兵（アーチャー）、騎乗兵（ライダー）、魔術師（キャスター）、暗殺者（アサシン）、狂戦士（バーサーカー）これら七つのクラスが召喚される訳ですが、さっきも言いました通り・・此度の戦争では既に五十二騎ものサーヴァントが現界しておりさらに、その数を増やしております。はっきり言いましてこれは異常です」

「は・・はあ・・・」

神威は一応、理解はしたもののまだ、ピンとはこないようだった。

だが、袴田は最早それを気にする風もなく最後にこう締め括った。

「故に我々聖堂教会の監督も手が足りないと言う在り様です、はい。しかしまあ、私に言える事は唯一つ。貴方の健闘をお祈り致します。ではくれぐれもご用心を！」

それだけ言うと袴田はその物腰からは想像もできない程の身のこなしと身体能力でその場を屋根まで飛び上がって去って行った。

後に残された神威は隣にいる己のサーヴァントを見る。すると、セイバーの方から口を開いた。

「五十二騎のサーヴァント・・・思っていた以上に熾烈な戦いとなりそうだな奏者よ。共に生き延びようぞ」

「は・・はい？」
事情と今現在、自分が置かれている身の上はどうにか理解せきた神威だったが・・やはり、気持ちが理屈に追い付いていないのかそう答えるより余裕がなかった・・・

これが二ヶ月前の事・・・そして、時は再び戻って雁夜がバーサーカーを召喚した深夜と同時刻・・・冬木市のとある某アパート・・・

「奏者よ。そなたも湯に浸らぬか？東洋人は湯浴みが好きであろう」
バスルームからセイバーの声が聞こえる。それを背に神威は気不味い声音で断った。
「いえ・・いいです。どうぞお構いなく」
神威はあの学校壊滅から二ヶ月が経過した現在を持ってしても何故、こうなったのかと自問自答していた。

リオンとセイバーことチェーザレの二人に学校を壊滅されてから僕とセイバーは家に帰らず居所を転々としていた。何しろ五十二組以上のバトル・ロワイアル・・・何時どこで襲撃されたとしてもおかしくはない。だからこそ家に戻るのは家族を危険に晒すと言うセイバーの言葉を受けて僕は大人しく従っている。
まあ、彼女の方が多分にこう言う事の専門だし元より従うより他はないだろう・・・けど・・本当に今更だけど、どうしてこうなったのかな？二ヶ月前までは普通の学生だったはずなのに・・・・

思わず嘆息をつく神威にバスルームから再び、セイバーの声が響く。
「どうした奏者？黄昏ておるではないか」
「だって・・・僕・・喧嘩すらまともにやった事ないのに・・・戦争だなんて・・・・」
思わず弱音が出る神威。

「うぬ・・・余のマスターはなかなかに神経質なのだな」
神威と対照的にのんびりとした口調でセイバーが言うと神威は言い返す。
「いきなり殺し合いに放り込まれて普通でいられるわけないだろう・・・」
すると、セイバーは少し強めの声で言った。
「だが、現実としてそなたは余を召喚し、この戦争に身を投じた。その事実を早急に受け入れねば・・・死ぬぞ」
その単語に神威は改めて身を固くする。

死ぬ・・・そう言う言葉はドラマとかアニメなどで何度も聞いた言葉だけど・・・こうして自分が身を置いている現実で聞く事になるなんて夢にも思わなかった・・・確かに、今の僕は聖杯戦争の参加者と言う奴なわけで・・・僕を除く五十一人の魔術師が僕を・・・その・・・殺そうとしている・・・わけで・・・それを事実として受け入れなきゃ・・・セイバーの言うように・・・し・・死ぬっ・・・わけでぇ・・・

そう考えていくと神威はますます、不安になって、ついには涙ぐみそうになる。すると、そこへ―
「奏者」
すぐ背後にセイバーの声が飛び神威は背後を振り返る・・と、硬直した・・・セイバーは風呂上がりの姿―要約すると一糸纏わぬ姿で右手には紅の大剣を持っている。
「ちょっ・・・！セイバー・・・ふ・・服をッ！！」
神威はすぐさま、眼を瞑って後ずさる。すると、セイバーは普段とは打って変わって静かな声で言った。
「奏者よ。そなたが不安や恐怖を感ずるのは無理もない。いや寧ろ、それを知らぬ者は単なるたわけだ。そも真の戦人とは不安と恐怖を内包しながらも前へ歩を進める者の事だ。そして何よりも、そなた

は余が守る。余はそなたに呼び出された最強の英霊であるが故に」
その静かながら確固たる強さを持った声に神威は少し、不安と恐怖が薄らいだ気がした。

この子・・・僕よりも華奢なのに・・・その小さな身体のどこにそんな力強さがあるんだろう？僕はそんな彼女の力強さに応える事ができるんだろうか？でも―

「ありがとう・・・セイバー。これからよろしく、お願いするよ」
神威は自分を守ると言ってくれた己のサーヴァントに感謝と盟約の言葉を口にする。そして、セイバーもいつもの偉そうな笑顔を浮かべて応える。
「うむ！こちらこそだぞ奏者よ！」
こうして、神威は改めて赤の剣士（セイバー）と契約を結んだ。

それから二日後の深夜、奏とキャスターは間桐家への潜入を試みていた。
「なあ・・キャスター。どうして今回は参加もしていない御三家の邸に忍び込む必要があるわけだ？」
奏が問うとキャスターはこう答えた。
「無論、聖杯戦争について調べる為だよ。君も此度はおかしいとは思っているのだろう？本来なら七騎が限度の所を百騎もなどと・・・」
アンシェルに告げられた百騎ものサーヴァントの現界・・・アレは紛れもない真実だったと二人は一日足らずで思い知った。何しろ、この冬木市から七騎では到底、説明が付かない程のサーヴァントの気配を至る所に感じるのだから・・・
「単純に今回は聖杯の力が更に増したって事じゃないのか？」
奏はそう言うが、キャスターは頷かない。
「それならば、それには明確な方程式（ロジック）と等価交換を経なければなら

ないはずだ。万事物事はそうして初めて動く。故に一足飛びに力が増すなどと言う事は決して、在り得ない。」
「それで・・その概要が間桐家にあると？」
奏がそう問うとキャスターは思慮深げに頷く。
「御三家の一角である間桐が此度の参戦を見送ったと言うのが気にかかってね・・・何か他の御三家すら知らない裏に精通している可能性が高い」
「裏って・・・何だよ？」
「私にもまだ、分からない。故に調べに行く・・・ッ！」
そこでキャスターは近くなった間桐家からサーヴァントの気配を感じた。
「奏」
「ああ、俺も感じた。行こう」
二人は急ぎ足で間桐家へと急行する。そして、その頃の間桐家の居間では・・・・

「おうおう・・・落伍者が今更、何をしに来たかと思えば・・・これは、これは・・・呵呵呵呵呵呵呵呵呵ッ！」
居間にある腰掛け椅子には不気味且つ醜悪なオーラを醸し出している老人が予期せぬ訪ね人に愉快な笑い声を上げた。だが、その訪ね人―間桐雁夜は隣に己のサーヴァント・バーサーカーを従え愉快とは程遠い怒りと強い決意を込めた眼で老人・・・間桐臓硯を睨み据えて言った。
「爺ィ・・単刀直入に言う。桜ちゃんを返せッ！！」

第五幕（前書き）

今回、かなり・・改竄しております。特に・・雁夜さん・・・

第五幕

「フン・・・返せじゃと？どう言う了見を持ってじゃ。遠坂の娘は次代の間桐の為に遠坂家から正式に引き取った養子じゃぞ？間桐の継承を拒んだ貴様がどうこう言える立場だと思っておるのか」
雁夜の要求を臓硯は無論、一蹴に附した。
「それにしても雁夜よ。よもや、貴様のような落伍者が独自に魔術の修練を積み、挙句に令呪を宿し、こうしてサーヴァントを従えて来るとはのう・・呵呵呵呵ッ！鶴野の子にはとうとう魔術回路が宿らなんだ事で間桐純血の魔術師は途絶えたと嘆いておったが、なかなかどうして、捨てた物でもなかったか」
臓硯は愉快そうに笑うが、雁夜は勿論、それに付き合う気は毛頭なかった。
「寝言は寝てから言えよ、吸血鬼。お前が今更、間桐一族の存続に拘っているとでも？要はあんたの腐った肉体を維持する為の贄が欲しいだけだろうが」
雁夜が侮蔑を込めて言うと臓硯は然りと頷く。
「儂が聖杯を手にし完全なる不老不死を手にするまでの繋ぎが必要不可欠だからのう」
「やはり・・・とどのつまりはそれが魂胆か・・・！」
雁夜は冷めた眼で妄執を抱える蟲の塊を見る。
間桐臓硯もかつては間桐家の始祖として高潔な理想を胸に抱いた人物であったと言うが、雁夜から見たコレは最早、生に浅ましく執着する餓鬼・・・否、かつてのマキリ・ゾォルケンと言う肖像画の成れの果ての残骸にしか見えなかった。そして、間桐一族はそんな残骸の私物としてその血肉を良いように吸い取られて来た・・
だが、それも今日で・・・終わる！
「だが、生憎とそれも今日で終わる。間桐もあんたの妄執もこの俺が終わらせてやる。そして、桜ちゃんは葵さんの下へ返す」

キッパリと断言する雁夜に臓硯は含み笑いを浮かべて言った。
「ほう・・雁夜よ。暫く見ぬ内に大口を叩くようになったな・・・魔術を独学で身に付けサーヴァントを召喚した事で居丈高になっておるのか？」
「舐めるなよ爺ィ・・・修練は元より経験だって積んだ。何より、いくらあんたでも英霊に敵うと思うほど自惚れちゃいないだろう」
雁夜は不敵な笑みを浮かべて見せる。そして、バーサーカーも主の言葉で臨戦態勢をすぐさま取る。
「ほう・・・見た所、バーサーカーのクラスを呼び寄せたみたいじゃが、しっかりと手懐けとるみたいじゃな・・成程。修練と経験を積んだと言うのも強ちハッタリでもなさそうじゃな。しかし、雁夜よ。お主、遠坂の娘を救う事が目的なら些か、遅過ぎたようじゃのう・・・呵呵呵呵呵呵呵呵呵ッ！遠坂の娘が当家に来て何日目になるか、お主、知っておるのか？」
その言葉に雁夜は戦慄する。
「まさか―爺ィッ！」
「初めの三日はそりゃあもう、散々な泣き喚きようだったが、四日目からは声も出さなくなったわ。今日などは明け方から虫蔵に放り込んで、どれだけ保つか試しておるのだが・・・呵呵呵、半日も虫どもに嬲られ続けてまだ、息がある。この分なら遠坂の娘の胎盤からはさぞ、優秀な魔術の因子が得られようて・・」
雁夜は憎しみすら通り越した殺意に肩を震わせる。これと同じような場面を雁夜は悪夢で見た事があった。その時の雁夜は何の力もなく、この外道の言うままにならざるを得なかったが、今は―もう、違う！雁夜は瞬時に自らの魔術礼装である飛針を出す。そして、眼の前にのうのうと居座る妖怪爺に凄まじい殺気を向ける。
殺す・・・このバケモノ・・否！このクソ外道を一片残らず！
一方、彼の従者（サーヴァント）も怒りに声を半ば荒げる。

「外道(クズ)が・・・ッ！」
「な・・なんとッ！？」
臓硯はバーサーカーが言語を話した事に度肝を抜くが、バーサーカーはそれも構わず続ける。
「大義の為でもなく理想の為ですらなく・・・唯・・己が命を醜く繋ぎ止めたいが為に無垢な少女を贄とするかッ！老害・・貴様はその果てに何を手にするつもりか？」
バーサーカーの怒気を込めた声にも流石に臓硯は何ら臆する事無く言った。
「フン・・サーヴァント風情に答える義務などないが、良かろう、答えてやろう。儂の悲願は始めから唯一つ『不老不死の法』を手にする。この一点のみじゃ。呵呵呵呵呵呵呵ッ！」
その答えに二人は完全にぶち切れると同時に静かに悟った。この醜悪な蟲の塊を断じて生かしておく事はできないと！
「臓硯・・・確かに俺は遅すぎた・・・もっと早く・・・せめて、一年前までに貴様を葬っておくべきだったッ！」
雁夜は魔術回路を起動させ魔力を礼装の飛針に流し込む。
「外道・・貴様の言い分はよく分かった・・・・・貴様はここで討つッ！」
バーサーカーも己の真の宝具『無毀(アロンダイト)なる湖光』を開帳し臓硯に向ける。
だが、老獪な怪物はこの劣勢にも拘らず、悠然とした態度を崩さなかった。そして、自分に襲いかからんとする雁夜とバーサーカーに言う。
「呵呵呵呵呵ッ！・・・お主ら一つ失念してはおらぬか？遠坂の娘には儂の刻印虫が植え付けられておるのだぞ」
その言葉に雁夜とバーサーカーは動きを止める。
「つまり、遠坂の娘を生かすも殺すも儂次第と言うわけじゃ。お主らがもし、儂に対し攻撃を加えた場合は・・・言うまでもなかろうな」

「爺ィ・・この期に及んで強がりは止せよ。それじゃあ折角、手に入れた『魔術師の胎盤』と言うあんたの目論見も水泡に帰すぞ」
雁夜は懸命に言葉と正論で臓硯を牽制するも臓硯は意にも介さない。
「ふむ・・確かに遠坂の娘の素養は稀な物・・・簡単に代用が利くわけではない・・・が、かと言って儂の命と引き換えにできる程の物でもないでなあ。呵呵呵呵！」
「ぐっ・・・！」
雁夜は歯噛みする。

そうだった・・・この妖怪爺が自分以外の者になど関心を持つわけがないじゃないか！桜ちゃんを欲する理由だって突き詰めれば自分の腐った願望を成就させる為の繋ぎ・・・道具でしかない・・・ならば、自分の命が脅かされれば当然、それと引き換えに道具を破棄する事くらい、この爺ィは平然とやってのける・・・何故、俺はそんな簡単な事に考えが及ばなかったんだッ！！

雁夜は己の迂闊さを呪いながら、棒立ちするしかない。バーサーカーも同時に武器を下す。臓硯はその様子を満足げに眺めて口を開く。
「さて、雁夜よ。お主の研鑽の程はこの爺も感服したわ。バーサーカーをここまで従えるのみならず、よもや、理性を残したまま召喚するとは・・・そこで物は相談じゃが、お主、此度の聖杯戦争で間桐の魔術師として参加せぬか？今のお主の技量ならば聖杯を勝ち取る事も夢ではなかろう・・・それによってお主が聖杯を獲れたなら遠坂の娘を解放する事も吝かではないがのう・・呵呵呵呵呵呵呵呵ッ！」
その厭らしい笑い声に雁夜は全身が総毛立つ程の殺意を改めて、このバケモノに抱くが、手も足も出す事ができない。そんな中、バーサーカーが念話で雁夜に語り掛ける。
（我が王（マスター）、耳を貸してはなりません。この老害は貴殿を骨の髄まで利用した挙句に葬るつもりです）

サーヴァントにそう諭され雁夜も念話で頷く。
（ああ、分かっている。今は・・・今はチャンスを見つけるしかないッ！）
しかし、そうは言ってもどうすればいいのか雁夜には全く分からなかった。このまま桜を人質に取られ続ければ雁夜は結局、あの悪夢の通りに、この蟲の塊の言うままになるしかない！
焦る雁夜に対し臓硯は急かすように言葉を続ける。
「どうした？黙っておらんで何か言え。答えは是か否か・・・儂は気が短いでな、このまま沈黙を続けるようならば遠坂の娘は―」

「答える必要などないよ間桐雁夜」
突如、第三者の声が介入し、その場の三人は一斉にその声のする方へ向くとそこには黒のロープを羽織った銀髪の少年―キャスターが佇んでいた。そして、彼の腕には―
「桜ちゃんッ！！」
雁夜はキャスターの腕に抱えられ毛布に包まれた桜の姿を確認し大声を出す。一方、臓硯は何故、キャスターが此処にいるのかよりも何故、今の今まで気付かなかったのかと驚嘆していた。
「き・・貴様、どうやって此処へ？それ以前に何故、この儂が今の今まで・・・ッ？」
臓硯が何時になく戸惑った声を上げるとキャスターは何でもないと言わんばかりに言った。
「何、大した事ではないさ。私は君などは足元にも及び付かない魔術師であると言うだけの事さ」
確かに、それはそうであろう。キャスターとは英霊に昇華された高名な魔術師だ。当然、現代の魔術師風情が敵う道理などない。
一方、雁夜はキャスターの腕に抱かれた桜に眼が行ってキャスターに喰ってかかる。
「貴様、桜ちゃんに何をしたっ！」
それに対しキャスターは朗らかに答える。

「そう息巻くな。若き魔術師よ。この子はもう大丈夫だ。体内に巣くっていた蟲どもは既に除去したよ」
その返答に全員が絶句する。特に臓硯は自身が丹精を込めて作った刻印虫がいとも簡単に除去された事に信じられないと言うように眼を剥いた。試しに桜の体内に巣くっているはずの刻印虫にリンクを繋げるが、反応がない。どうやらキャスターが言った事は本当だったらしい。呆然としている臓硯に彼はケロっと言った。
「少々、癖の悪い蟲だったが、子供騙しな業だったよ」
その言葉は臓硯にとっては屈辱以外の何物でもなかったに違いない。自身が生涯を賭けて必死で編み出した業をこのサーヴァントは『子供騙し』と評したのだ。
その時、居間のドアが破壊された。そこには勝利すべき黄金（カリバーン）の剣を手にした奏がいた。その姿を見た雁夜は眼を見開く。
「か・・奏？どうして、ここに？」
「雁夜さん、お久しぶりです」
奏がそう平然と挨拶するのを雁夜は呆然と見る。
「我（マスター）が王、お知り合いですか？」
バーサーカーに問われ雁夜は徐に答える。
「あ・・ああ、仕事の関係上で知り合った友人だ。けど、奏・・お前がいるって事はこのキャスターはお前の・・」
「はい、俺のサーヴァントです。でも、雁夜さんまで参戦していたとは思いませんでしたよ」
奏も少し、驚いたように雁夜の隣に控えるサーヴァント・バーサーカーを見る。だが、バーサーカーは奏よりも奏の手に握られた宝具に眼が行っていた。何故なら、それは自身がかつて、唯一無二、仕えた主君が持つべき剣であるからだ。
「キャスターのマスター、何故に貴公がその剣を持っている？それは―」
バーサーカーが思わず問うとキャスターの声がそこに割り込んだ。
「何故と問うなら私が逆に君に問いたいね」

バーサーカーはキャスターの方を見る。すると、澄んだ碧眼がバーサーカーを見つめる。バーサーカー・・いや、ランスロットはそれを何処かで見たような瞳だと思った。そう・・これは―と、考えかけて頭を振る。

何を馬鹿な・・・第一、この者とあの方とでは歳が・・・

その考えの途中でキャスターはバーサーカーに問うた。

「ランスロット、君とも在ろう者が何故にバーサーカーのクラスで現界している？と言うよりそれで居て何故、理性を残しているのだね？」

その言葉にバーサーカーは今度こそ悟ったように眼を見開いた。だが、それと同時に暫く余りの事に呆けていた臓硯が我に返り今度こそ余裕を失くしたように怒鳴る。

「貴様らッ！儂を無視して話を進めるなッ！！」

その声にキャスターは振り返って言った。

「おや？まだ、居たのかね？てっきり、とっくに逃げた物とばかり思っていたが」

その白々しい物言いに臓硯はますます苛立つ。

若造がッ！・・白々しい事を・・そのような隙を見逃すお前達（サーヴァント）ではなかろうがッ！まあ、それも普通の魔術師ならばの話じゃがな・・・呵呵呵呵呵呵ッ！

と、臓硯は再び悠然とした笑みを取り戻す。自分の身体を構成しているのは無数の蟲達。そして、自らの肉体はその中でも極小の蟲だ。加えて万が一に備え屋敷中に自分の新たな肉体を構成する蟲達が蠢いている。この肉体を一度、バラ撒き、それに紛れれば・・・

だが、そんな臓硯の浅はかな考えを見透かしたようにキャスターは言った。

「ああ、一つ言っておくが、屋敷に無数に蠢いていた蟲は一匹残らず、私のマスターが駆除したよ。勿論、虫蔵にいた蟲も含めてね」
「なッ！？」
臓硯は本当に今度こそ余裕を失くしたように呻き声を上げる。
「これで詰みと言う奴だ。とは言え、君には聞きたい事がある」
キャスターの問いに臓硯は訝しむ。
「聞きたい事・・・じゃと？」
「そうだ・・・冬木の聖杯戦争を考案した一人であり令呪のシステムを確立させた君ならば気付いているのではないか？この戦争がとっくに狂い始めていると言う事にだ」
その言葉に臓硯はキャスターの言わんとしている事を悟った。
「ほう・・・サーヴァント風情が嗅ぎつけるとはのう・・・そうよ、六十年前の第三次に置いて、アインツベルンのサーヴァントの不発召喚によって何かがおかしくなった。故に此度は参戦を見送ったのよ・・・しかし、お主、よくそれに・・・」
「元より百騎ものサーヴァントの現界などと言う異常事態が発生しているのだ。おかしいと思わない方がどうかしている」
「然りよ。儂に言わせれば遠坂の小僧もアインツベルンも馬鹿の集まりよ・・・前回の戦争による不発召喚で聖杯に何らかの異常が起こっている事は明々白日であろうに・・・」
キャスターはその言葉を聞くと暫し黙考した後に口を開いた。
「成程・・・知りたい事は分かった。貴重な情報提供を感謝する。では君には・・・そろそろ安らかに退場していただこうか」
キャスターが明らかな殺気を放って言うと臓硯は嘲笑う。
「フンッ！甘いわ！屋敷の蟲どもを殺したくらいで退路を断ったつもりか？笑止よ、この身体を無数の蟲にバラけさせ逃げ遂せてくぅ・・・ぬぁッ！？」
臓硯は自らの身体を構成している蟲に命令を伝達しようとしたが、蟲達が・・即ち、自身の身体のコントロールが利かない事に初めて気づく。

そんな臓硯にキャスターは言った。
「残念だが、逃がしはしないよ。私がと言うより・・・彼がね」
その言葉で初めて臓硯は雁夜の無数の飛針が自身の身体を構成する一つ一つの蟲に突き刺さっている事に気づく。さらに忌々しい事にその無数の飛針は自身の本体にまで届いている。
「かッ・・雁夜ァァッ！きぃ・・貴様ァァッ！！」
呻く臓硯に雁夜は冷徹に事実を言った。
「その飛針は俺の魔力を通す事で対象の感覚を麻痺し動きを止め、時には死に至らしめる物だ。そして、もう一つ効果がある。あんたが一番良く知っている効果がな・・・」
その言葉だけで臓硯は雁夜が言わんとする事に気づく。
間桐の魔術属性は『水』そして、その特性は・・・『吸収』ッ！
すると、臓硯の身体を形作る蟲の一匹一匹から魔力がズイズイと飛針に吸収されて行く。それは即ち、臓硯にとっては正しく『死』を意味するッ！
間桐から出奔した雁夜が十一年間をかけて血の滲むような研鑽を積み、ついに編み出した独自の魔術であった。

馬鹿なッ！この儂がこのような所で・・！それも・・それも・・ッ！こ・・こんな落伍者などにィッ！？
い・・嫌だ・・・嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だッ！！！儂は・・こぉ・・こんな所で・・・死にたく・・・なぁ―

それが間桐臓硯・・・いや、間桐の始祖、マキリ・ゾォルケンの最後の意識だった。

それから暫く落ち着いた後に四人は話し合いの席についた。
「初めに礼を言わせてもらうよ。君らがいなきゃ桜ちゃんを救う事はできなかったかも知れない」
まず、雁夜が奏とキャスターに頭を下げて礼を言う。

「なに・・礼を言われる程の事はしていない。それよりも私達は君達に二三聞きたい事や頼みたい事がある」
キャスターがそう問うと雁夜が徐に口を開き聞き返す。
「何だ？」
「まずはそうだな、君達の聖杯にかける願いを聞かせてはくれないか？」
そう問われ雁夜とバーサーカーはそれぞれ答えた。
「俺の目的は桜ちゃんを臓硯から救い出し、どうしても一発はぶん殴ってやらなきゃいけない奴がいる・・・そいつも聖杯戦争の参加者だ。だからこそ俺はこの戦いに身を投じたんだ。別に聖杯その物が目的ってわけじゃない」
「私はこの戦争において召喚されるであろうかつての主君の願いを阻む為に現界した。我が王（マスター）と同じく聖杯その物に用があるわけではない」
雁夜とバーサーカーの順で答えるとキャスターはフムと頷き言った。
「では頼みの方だが、この間桐邸にある聖杯戦争の記録書を見せてはくれないか？」
「あ・・ああ、別に構わないが」
雁夜はにべもなく了承する。
「感謝する」
キャスターが礼を言うと突如、バーサーカーがキャスターに声をかけた。
「お久しぶりです・・・」
その言葉に雁夜や奏は驚いたように眼を丸くする。唯一人、キャスターだけが溜息をついて諦めたような顔になる。
「バーサーカー、このキャスターをお前は知っているのか？」
雁夜が驚いたような声で問うとバーサーカーは頷く。
「ハッ、奏殿が使っていた宝具『勝利すべき黄金の剣（カリバーン）』・・あの剣を宝具として持ち得るのは私のかつての主君とこの方だけです。ただ、私が知っている生前のお姿とは見違えるようでしたので半信半

疑ではありましたが、こうして直接、話して確信が持てました」
その言葉に眼を丸くしていた奏も漸く悟った。己のサーヴァントの真名を・・・いや、本当はキャスターの過去夢を見て、宝具としてかつて、かのアーサー王が抜いた選定の剣を開帳した時から薄々、知っていた。バーサーカー・・いや、アーサー王に仕えた円卓の長、サー・ランスロットが言うようにこの剣をアーサー王以外で宝具として持ち且つ魔術師(キャスター)のクラスと来れば該当する英霊なんて・・たった一人しかいないじゃないか。
唯・・・こんな少年の姿で召喚される物だから、すっかり先入観を持ってしまった。だが、今ならば分かる。このキャスターの真名は・・・
奏は呟くようにその名を口にする。
「ブリテンの史上最強の魔術師・・・マーリン・アンブロジウス・・・キャスター、それがお前の真名か?」
すると、キャスター・・・いや、マーリン・アンブロジウスは今までにない程、不敵な笑みを浮かべて言った。
「左様・・・この身は正しく最強の魔術師(キャスター)・・マーリン・アンブロジウスである」
とうとう自らの真名を明かしたキャスターにバーサーカーは跪いて謝罪を口にする。
「マーリン殿・・申し訳もございませんッ!この身は・・この身はッ!」
嗚咽を漏らすバーサーカーにキャスターは言った。
「ランスロット・・・詫びる事など何もない。私には勿論、アルトリアにも・・・いや、誰にだってないよランスロット」
その声はとても穏やかで少年の声とは思えないほど大人びていた。
まあ、それも当然だ。このサーヴァントは自分達よりもかなり目上なのだから・・・
バーサーカーは相も変わらず嗚咽を続けている。キャスターはそれを何とか宥めている。奏と雁夜は暫く、自分達のサーヴァントのそ

んな様子を見守っていた。

そして、翌朝の事・・・間桐にあった聖杯戦争の記録を一通り読み終えたキャスターは一同と話し合いに移った。

「さて、時間もないので要点だけを言おう・・・この地に眠る聖杯・・・かなり不味いかも知れない」

キャスターの言葉に三人の間に緊張が走る。

「不味いって・・・具体的に何がだ？」

奏が開口一番に問うとキャスターは何時にない程、深刻な面持ちで報告を続ける。

「まず、その前に説明しておきたい事がある・・この聖杯をかけた戦いだが・・・現時点において、その優勝カップである『聖杯』は・・・存在しない」

その言葉に一同は今度こそ絶句する。

「ま・・待ってくれ！聖杯戦争って言うのは聖杯を手に入れる為の闘争だろ？なのに肝心の聖杯がないってどう言う事なんだ！？」

雁夜が思わず素っ頓狂な声で問うとキャスターは言葉をこう繋げる。

「聖杯をかけて戦う・・・それは正確な表現ではないね。いや、と言うより・・・『戦う』必要すらないんだ。本来ならばね」

「「「なぁッ！？」」」

三人はさらに驚愕に眼を剥く。

「戦う必要がないって・・・・じゃあ世間一般には何で魔術師の生存戦（バトルロワイアル）なんて事になっているんだ？」

奏の疑問も尤もだ。戦う必要がないと言うなら何故、態々こんな殺し合いを？

その疑問にキャスターはこう答えた。

「それは単なる方便だよ・・・実際は本当に英霊同士を戦わせる必要なんてないんだ。唯・・七騎の英霊を召喚すればたった、それだけで良いんだ」

「たった・・・それだけって・・・？」

雁夜も余りの事に二の口が告げないでいるが、本題はここからだった。
「そう・・たった、それだけ・・・召喚し自害させて初めて『聖杯』が出来上がる」
今度こそ三人の顔は凍りついた。
「マーリン殿・・・自害とは・・一体？」
バーサーカーが徐に問う。それに対しキャスターは静かに説明を続ける。
「要約すれば『聖杯戦争』と言う物のは『根源に至る』為の魔術礼装を作り上げる儀式であると言う事だ。聖杯と言う願望機は奇跡の業なんかじゃない。ちゃんとした方程式（ロジック）と等価交換を経て為す魔術儀式なのだ。
まず、冬木の地脈からマナを汲み上げサーヴァントを召喚できる程の魔力を六十年かけて蓄える魔法陣を描く。これを『大聖杯』と呼び、脱落したサーヴァントの魂を固定する機能を持った器を『小聖杯』と呼ぶ。
そして、英霊の座に帰ってゆこうとする七騎のサーヴァントを一気に解放する事で極大の孔を開け、その孔を小聖杯が暫し固定する事によって根源に至る。これが『聖杯戦争』の真の用途なのだそうだ。
また、『万能の願望機』としての機能はその固定したサーヴァントの魂その物だよ」
その事実に一同は皆一様に驚き戸惑い悟った。英霊を呼ぶ。その真の意味する所を・・・
「つまり・・・最後には自分のサーヴァントも殺す必要があると？令呪はその為の物って事か・・・」
奏が簡潔に答えを口にすると雁夜は侮蔑も露わに吐き捨てた。
「よく・・考えた物だな・・・あのクソ爺ィ・・ッ！」
元々、一般人的な感性を持つ彼だ。如何に英霊と言う人外が相手でもその他者を利用するだけ利用して最後には殺すと言う如何にも彼が知る『魔術師と言う外道』その物な考え方に怒りを抑え切れない

のだろう。
そんな中、キャスターは静かな声で皆に語りかけた。
「唯・・・皆、これは背景的な話だ。本当に深刻な問題は別にあると言っていい」
その言葉に皆は一様にキャスターの顔を見る。
「マーリン殿・・・深刻な問題とは如何なるものなのです？」
バーサーカーは凛とした声で問い、奏と雁夜も真剣な面持ちでキャスターを見つめる。キャスターは息を整えて本題を口にした。
「話は前回の第三次聖杯戦争にまで遡る。そう・・間桐臓硯も言っていた。アインツベルンによるサーヴァントの不発召喚にまでな・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9510z/

Fate/BattleRoyal

2012年1月9日23時54分発行